The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新疆維吾尓自治区新出ソグド語資料
Author(s)	吉田, 豊
Citation	神戸市外国語大学外国学研究. 1991, 23, p. 57-83
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/16793
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

新疆維吾尔自治区新出ソグド語資料

——1990年調査旅行報告——

吉田　豊

（平成２年度科学研究費補助金「国際学術研究」による研究成果の一部）

0. はじめに

筆者は，1990年９月から10月にかけての約10日間，新疆維吾尔自治区に滞在した．この間ウルムチにある同自治区博物館，トゥルファン，及びクチャを訪問し，各地区で文物の調査を行った．本調査旅行は，新疆維吾尔自治区文化庁の招聘と，文部省の補助金により実現したものであり，関係諸機関に改めて謝意を述べたい．また今回の調査は，1988年に三菱財団人文科学研究助成金により訪中した森安孝夫氏に同行したことがきっかけであり，同氏にも感謝する．

本稿は，今回の調査旅行によって知り得た，主にソグド語の新出資料について，調査地点ごとにまとめたものである．それらを調査旅行報告の形で発表するのは，発見された事実が雑多で，一つの論文としてまとめることが困難に思われたからである．さらに，一部の資料については，入手可能な写真その他の情報に限界があり，最終的な研究の発表にはもう少し時間を要すると思われる．しかしながら，資料の重要性を考慮すれば，できるだけ早い時期にその存在を紹介し，多くの研究者の関心を集めることが肝要と考えた．本報告を読まれて興味を持たれた方は，新疆維吾尔自治区文化庁なり筆者なりと連絡をとり，日中共同で研究を進められたい．(1)

（1） 吉田豊，森安孝夫，新疆ウィグル自治区博物館，「麴氏高昌国時代ソグド文女奴隷売買文書」，『内陸アジア言語の研究』IV（神戸市外国語大学外国学研究 XIX），1988，pp. 1-50は，そのようにして実現した共同研究である．

1. トゥルファン

1. 1 拝西哈尔石窟

拝西哈尔石窟は，ベゼクリク千仏洞の北約2 km のところにある．最近出版された『新疆石窟　吐魯番伯孜克里克石窟』（新疆人民出版社，上海人民美術出版社，1989）の買買提・阿吉氏の説明によれば，拝西哈尔石窟には5つの窟があるとあるが，現地でみる限り，第5窟の右にさらにもう一窟の入口が見えている．発掘がすすめば，もっと多くの窟が発見されるように思われた．これらの窟は現在，木の幹で格子を組み外から入ることができないようにしてある．そのうち，文字資料が残っている第3窟には，特別の許しを得て入ってみた．『上掲書』の図版（図129）では，文字の判読が不可能であるからである．今回その原物を実見した印象では，第3窟前室左壁のウィグル文の題記の字体は，所謂古典期[(2)]（大概モンゴル期）の文書中にみられる草書体であった[(3)]．それ故，上掲の『新疆石窟』の説明が，壁画から拝西哈尔石窟の時代を9世紀とするのは，明らかに再考を要しよう[(4)]．

1. 2 ベゼクリク千仏洞

1. 2. 1 マニ文字の落書き

1988年に，森安孝夫氏とベゼクリク千仏洞の中のマニ教窟を調査した際，第27窟[(5)]と第38窟にマニ文字の落書きを発見していた．今回の調査で，第8窟にもマニ文字による落書きがあるのを見つけた．この発見は2つの点で重要である．第一は，マニ教徒だけが用いるマニ文字の存在は，それが書かれた窟がマニ教

（2） ウィグル仏典を，古典期のものと先古典期のものに分類することについては，P. Laut, *Der frühe türkische Buddhismus und seine literarischen Denkmäler*, Wiesbaden, 1986, p. 10 参照．

（3） ウィグル文字の字体に関しては，森安孝夫，「ウィグル語文献」，『講座敦煌6　敦煌胡語文献』，東京，1985, p. 16 の説明を参照した．

（4） 題記の部分は，破損が多い上に文字が相当かすれている．解読は，ウィグル語の専門家に委ねられなければならない．

（5） ベゼクリク千仏洞の編号は，上述した『新疆石窟』に従っている．この編号は，ドイツ隊によるものや，最近『文物』1985年第8期，p. 50 で提示されたものとは異なるので注意されたい．現在ベゼクリクで用いられている編号は，『新疆石窟』のものと同じなので，今後この編号に従うのが便利だと考えた．

窟であったことを強く示唆する．従って，例えば第8窟は従来マニ教窟であるとは知られていないが，この発見によりマニ教窟であった時代があったことがほぼ確実になった．第2に，筆者によって発見された3例の落書きは，どれも縦書きされていることである．マニ文字は，マニ教の始祖マーニー（A. D. 216-276/7）がアラム系のパルミラ文字をもとに作ったもので，本来右から左へ横書きされていた．トゥルファンから出土するマニ文字文献は，横書きで冊子（folio）形式のものである．今回発見された落書きは，マニ文字が縦にも読み書きされていたことを明確に示してくれる。(6)

これらの落書きの読みは，保存状態が劣悪で非常に困難である．残念ながら今なお満足のいく解読に到っていないが，現在までに判読できたところを提出する．

第8窟

マニ文字の落書きは，前室の左壁に2箇所(左から a, b)，後室の奥壁の右側に1箇所みえる．これらは，釘の先のようなもので刻み込まれたものである．

(a) 1. 'lp / 2. 'wg(?)wlzm

'lp はウィグル語の alp「勇敢な」に違いない．2行目の語は不明である．全体は人名ではないかと思う．

(b) 1. 'wrw(n)(?) / 2. rwšn[ ] / 3. (...)z(..γ..)'(..)'wl

'wrw(n)(?) は，ウィグル語 orun「居場所，座席」か．rwšn は中世ペルシア語或いは，パルティア語で「明るい」を意味する語で，マニ教文献に頻出する．'wl はウィグル語 ol「彼，～である」であろう．

(c) 1. (...) / 2. fr(y)'ng

fry'ng は「愛された，友人」を意味するパルティア語である．ここでは人名の一部か．(7)

---

(6) マニ教の細密画の人物像には，人名が縦書きのマニ文字によって書き込まれた例がある．I B 4979はその例である．しかしこの場合には，スペース上の制約から縦書きされたとも考えられた．

(7) この窟には，マニ文字以外にも，半楷書体のウィグル文字で書かれた落書きがある．例えば(a)の左隣には xwtp(wlmy)s と読める語がある．これはウィグル語の qutbulmīš にあたるが，接尾辞の形式 -mīs は，マニ教文献に特徴的なもののようである．cf. P. Zieme, *Manichäisch türkische Texte* (Berliner Turfantexte V), 1975, p. 30, n. 3.

第27窟

奥壁のやや左より．仏教窟の壁が落ち，もとのマニ教窟の壁面が現われている部分に[8]，灰緑色の絵の具で書かれている．

1. '(ry)'m('n) / 2. šhry'r / 3. q̈y'
(??) (??)

'ry'm'n, šhry'r は各々「友人(イエスの epithet)」,「王」を意味する中世ペルシア語形である．ここではウィグル語の人名構成要素 q̈y'(=qïya) とともに現われるので，全体は人名を表わすものであろう．'ry'm'n も šhry'r も，マニ教徒の人名の構成要素となった例が知られている[9]．

第37窟

右壁の中央，やや入口より．楽人像の右上方に2箇所．(左から(a)，(b)とする．) 今のところ，意味をなす語を判読できない．これらも釘の先のようなもので刻み込まれたものである．

(a) 1. [.](w)'(d)[ ] / 2. pw
(?) (?)

(b) 1. p[ ][a] / 2. (.d)p(')t̲[b]
(?) (?)

[a] p の後には文字が書かれていないかもしれない；[b] この行の右にも数行あったかもしれないが，壁面が剥落している．

1. 2. 2 第20(B)窟

第20窟は，ドイツ隊が壁画を切りとったことで有名な窟であるが，その奥に小さい窟が発見され，20(B)と編号されている．壁画は上掲『新疆石窟』図版42-46に発表されている．左壁は上下に4つずつの仏の座像が残されており，像の上や像と像の間の24箇所にわたってウィグル文字の書き込みが認められる[10]．

(8) 森安孝夫氏は，ベゼクリクにあるマニ教と仏教の二重窟について詳細な報告を行う予定である．二重窟に関しては，Geng Shimin, H. -J, Klimkeit, and J. Laut, *ZDMG* 137, 1987, p. 45 も参照せよ．第27窟の落書きの写真は，森安氏が準備中の研究書に掲載される予定である．

(9) Cf. mr wxmn šxry'r (J. Hamilton, *Manuscrits ouïgours du IXe-Xe siècle de Touen-houang*, Tome 1, Paris, 1986, p. 58, 11. 14-15), 'ry'm'n frystwm xwštr (L. Clark, 'The Manichean Turkic *pothi*-book', *AoF* 9, 1982, p. 175, 1. 278).

(10) 1988年にここを調査した森安氏によれば，上段の左端の像の足の部分にルーン文字が見えるという．また彼は，これらの仏像が，敦煌出土の文書 (Pelliot sogdien 26) に描かれた2↗

字体は半楷書体であり，一見してウィグル文字の中では古いものであることがわかる．殆んどは人名で，中でも il arslan, ïnal taš が4度くり返されている.[11]

興味深いのは，それらの人名の中に，(x)w(š) twšyst（上段の右端の像の左）と škmwn'sic βntk（下段の右から2つめの像の左下）と読めるものがあることである．前者の twšyst は，マニ教中世ペルシア語の dwšyst「最も親愛なる」をウィグル文字で表記したもので，本来マニ教徒の人名である.[12] また後者は，š'kmwn βntk の誤写と考えられる.[13] βntk は「奴隷，僕（しもべ）」を意味するソグド語で，人名の構成素要としてもしばしば用いられる.[14]

古い層に属するウィグル語の資料の中に，このようにマニ教及びソグド語の要素が認められることは，ソグド人のマニ教徒を介してマニ教に改宗したウィグル人の一部が，後に仏教徒になったもので，それがトルコ仏教の源流だとする最近の森安の説を補強するものとなるだろう.[15] 初期のウィグル人仏教徒が用

↙体の仏像と，非常に良く似ていることを指摘して下さった．P 26 には，トルコ人によって書かれたと考えられる ソグド語の銘文が記入されており，この種の資料を総合的に扱った N. Sims-Williams と J. Hamilton によれば，9世紀の終わりから11世紀の初めの頃のものだという，cf. N. Sims-Williams and J. Hamilton, *Documents turco-sogdiens du IXe-Xe siècle de Touen-houang*, (CII, Part II. Vol. III/III), London, 1990, pp. 37-38. この年代は，第20(B)窟の年代決定にも参考になるだろう．

(11) 下段の左端の像のさらに左に，やや長めの銘文が2行あり，ほぼ同じ内容の2つの文が1行ずつ書かれている．右のよりよく残っている方は次のように読める：
mn y'nky "γ(δ)[w](q) p(y)tk'cy p'ksyk [pytyyw] t'kyntym「私，新米の下手な書記 Bägsig が書き奉った.」
同様の内容の奥書きは，マニ教文献（A. von Le Coq, 'Türkische Manichaica aus Chotscho I', *APAW*, Nr. 6, 1911, pp. 21, 28; *idem*, 'Türkische Manichaica aus Chotscho III', *APAW*, Nr. 22-2, 1922, p. 43, T. M. 301, 11. 12-13）や，初期の仏典（Hamilton, *op. cit.*, pp. 8-9, 11. 47'-48'）に現われる．森安孝夫氏は，これら以外にも同様の奥書きが見られる例として，J. Hamilton, *Le conte bouddhique du bon et du mauvais prince en version oïgoure*, Paris, 1971, p. 93（これについてはさらに，森安孝夫，『講座敦煌6　敦煌胡語文献』，東京，大東出版社，1985, pp. 25-26 も参照）及び P. Zieme, *AoF* 7, 1980, pp. 197-245 を教示して下さった．

(12) この人名を帯びたマニ教徒（twšyst wxmn）は，マニ教ウィグル語文献に現われる．Le Coq の上掲 'Türkische Manichaica aus Chotscho I', p. 25, 1. 34参照.

(13) 正しい形式 š'kmwn「釈迦牟尼」は，この壁画の銘として，別に2度現われている．

(14) E. g. βγy-βntk, cf. 吉田豊，「ソグド語雑録（III）」，『内陸アジア言語の研究』V（神戸市外国語大学外国学研究 XXI), 1989, p. 97.

(15) 森安孝夫，「トルコ仏教の源流と古トルコ語仏典の出現」，『史学雑誌』第98編第4号，1989, pp. 1-35 参照.

いたソグド語については，下記2.2も参照.

1. 2. 3 その他

1988年に調査した際，偶然第9窟の壁面にウィグル文字のアルファベットらしきものを見付けた．その後の研究で，それが正しくウィグルのアルファベットであることを確認した．ソグドのアルファベットが23文字から成るのに対し，ウィグルのものは19文字と最後に付加された šmx から構成されており[16]，第9窟のものは後者である．現在森安孝夫氏が準備中の研究書に，このアルファベット表の写真は掲載される予定である．今回，休息のあい間に吐魯番地区文物管理所の買買提・阿吉氏が案内してくれた第34窟の左壁の，彼が突厥文字として示したものは，実際にはパスパ文字であった．興味深い資料が，このようにちょっとした偶然からも発見される．

従来千仏洞についての研究は，窟の構造と壁画に集中し，銘文や落書きの研究は二の次であった．研究の最初の段階ではそれは仕方のないこととしても，今後はすべての窟について，これらの文字資料の研究が行なわれるべき段階に入ったと思う．それによって初めて，千仏洞の総合的理解が達成されることになるだろう．

1. 3 吐魯番地区文物管理所

1980—81年に，ベゼクリクでは大規模な発掘が行なわれ，多数の文物が発見された．この発掘の簡単な報告は，『文物』1985年第8期，pp. 49-65（『文物』と略す）に於いて発表されている．ここではそれらの発掘品の中のイラン語の資料についてまとめておきたい．『文物』によれば，この時の発掘で，3つの地点から合計804点の文書が発見された．これらは．発掘年（80或いは81），ト

(16) ウィグル文字のアルファベットについては，G. Clauson, *Turkish and Mongolian studies*, London, 1962, pp. 107-08, 180-81 参照．ソグド文字のアルファベットについては，N. Sims-Williams, 'The Sogdian sound-system and the origins of the Uyghur script', *JA* 269, 1981, pp. 347-60 参照.

ゥルファンのベゼクリクを示す略号（ＴＢ），発掘地点を特定する略号（Ｉ：堆積土中から発掘されたもの；10：第10窟；60：現在の第02窟[17]），及び各々の地点の出土物に与えられた通し番号によって整理されている．例えば，80ＴＢ10：08ｂは，1980年にベゼクリクの第10窟で発見された文書で，08の番号が与えられたもののｂ面であることを示す．『文物』によれば，堆積土中から782点，第10窟から14点，第02窟からは８点発掘されている．

これらの文書は，吐魯番地区文物管理所に保管されている．閲覧するには，最初に名刺版の大きさの文書の写真をはり付けた４冊のアルバムを見せてもらい，興味のあるものをさがし，上で述べた整理番号によって実物を請求するという手続きをとる．

ソグド語の文書は多くないが，『文物』の記載には誤りがあるので，ここで筆者が調査したことを報告しておく．『文物』によればソグド語の文書は第02窟（発掘当時の第21窟）から発見された８点である．1988年に森安氏と筆者が調べたところでは，これは誤りで，そのうちの３点（81ＴＢ60：01～03）だけがソグド語で，残り（81ＴＢ60：04～08）はウィグル語であった[18]．これらはすべて，マニ教徒が書いた手紙で，そのうちの最も長いもの（81ＴＢ60：01，2.6m）は，極彩色の絵を含む．この絵の写真は『文物』に発表されている．筆者が文物管理所を訪れたときには展示されていた．これら８点の手紙は，筆者と森安氏が文物管理所と共同で研究をすすめており，近くその成果が発表される．

ソグド語の文書は，第02窟の３点だけでなく，堆積土中から発掘されたものの中にも何点かの断片がある．それらはすべて正書体（従来スートラ体と呼ば

---

(17) 第02窟の編号は何度か変ったらしく，発掘当時は第21窟と呼ばれていた．その後第60窟に変ったためであろうか，この窟発現の文書は，現在は 81ＴＢ60 の番号を帯びている．さらにその後第02窟と変更されたらしい．（ただし文書の番号はそのままである）．なお，今回阿吉氏に聞いたところでは，第02窟で見っかったとされる文書は，第03窟の側壁の小さな穴の中に差し込んであったという．

(18) 森安氏によれば，これは，発掘で得られた他のウィグル文書とは全く異なり，ソグド文字の草書体に似た半楷書体のウィグル文字で書かれた文書を，ソグド語文書と見誤ったためであろうという．

れているもの）で書かれた仏典の断片で，多くの場合裏面は草書体のウィグル仏典である．従って，これらのソグド語仏典は廃紙利用されたものであり，ベゼクリクにソグド人の仏教徒がいたことを必ずしも意味しない．

現在までに筆者が把握している，堆積土中出土のソグド語断片は次の通りである．これらはすべて，10行以下の両端を欠く小断片で，内容の比定が不可能なのは残念である．

1. 80ＴＢＩ：529ａ（ｂ面はブラーフミー文字を含むウィグル仏典）
2. 80ＴＢＩ：533　（ｂ面は白紙）
3. 60ＴＢＩ：552ａ（ｂ面はウィグル仏典？）[19]
4. 80ＴＢＩ：554ａ（ｂ面は草書体のウィグル仏典）
5. 80ＴＢＩ：558ａ（ｂ面は草書体のウィグル仏典）
6. 80ＴＢＩ：562ａ（ｂ面は草書体のウィグル仏典）
7. 80ＴＢＩ：576ａ（ｂ面は草書体のウィグル仏典）
8. 80ＴＢＩ：580ａ（ｂ面は草書体のウィグル仏典）
9. 80ＴＢＩ：584
10. 80ＴＢＩ：749ａ（80ＴＢＩ：554と同一文書の離れか．ｂ面は漢字混じりのウィグル仏典）

これらとは別に，80ＴＢＩ：644は，漢文仏典（『金剛般若経』）の裏に，ソグド文字でマニ教パルティア語の讃歌を書いたものである．[20] 漢文仏典は，マニ教徒が廃紙利用する場合しばしばするように，横の辺にそって半分に切断したものを用いている．

『文物』の表からも明らかな通り，ウィグル語の文書は非常に多く出土した．

---

(19) 筆者はｂ面のテキストについてのメモを書き忘れている．

(20) ソグド文字によって音写されたマニ教中世ペルシア語及びパルティア語の資料は，トゥルファン出土文献の中にいくらか見出される．最近の研究には，N. Sims-Williams, 'A new fragment from the Parthian hymncycle *Huyadagmān*', in : C. -H. de Fouchécour and Ph. Gignoux (eds.), *Études irano-aryennes offertes à Gilbert Lazard*, Studia Iranica Cahier 7, Paris, 1989, pp. 321-31 ; Y. Yoshida, 'On a Manichaean Middle Iranian fragment lost from the Ōtani collection', 崎山理・佐藤昭裕編，『アジアの諸言語と一般言語学』，東京，三省堂，1990, pp. 175-81 がある．

それらの中でも特に重要なのは，5葉からなるマニ教文書であろう（80TBI：524，1-5）．このうちの2葉は，始め新疆維吾尓自治区博物館の，多魯坤・闕白爾及び斯拉非爾・玉素甫によって研究された[21]．その後この同じ2葉は，Geng Shimin, H.-J. Klimkeit 及び J. Laut によって再研究された[22]．彼ら3人は，最近になって残りの3葉も発表している[23]．

これらの研究では言及されていないが，この5葉と同じ文書に属する断片がさらに4片ある[24]．80TBI：525の整理番号を付されたこれらの断片が，本体の5葉と同じ文書に属することは，字体から容易に判断できる．のみならず，うち一つの断片に見える headline（各葉の初頭に本文とは少し離して書かれた一種の見出し）の yaγï wrmzt は80TBI：524の一葉の headline と全く同じものである．今後この文書を研究する際は，80TBI：525の4断片もあわせて研究することが望ましい．

2. クチャ

今回クチャを訪問した目的は，この地域にある千仏洞の中に，ソグド語の題記や銘文或いは落書きをさがすことであった．P. Pelliot がクチャ地区で撮影した古い写真の中に，実際にソグド語の落書きが写っており[25]，とりあえずは，それを現地で実見しようと考えていた．ところが Qyzyl Sairam で撮影されたとあるその写真を，Qyzyl の千仏洞を管理する人や，新疆亀茲石窟研究所庫

(21) 上掲，『内陸アジア言語の研究』IV, 1988,「はしがき」及び pp. 77-86 参照.

(22) Geng Shimin, H. -J. Klimkeit, and J. Laut, 'Manis Wettkampf mit dem Prinzen. Ein neues manichäisch-türkisches Fragment aus Turfan', *ZDMG* 137, 1987, pp. 44-58. 彼らが先行研究に何ら言及しないのは残念である.

(23) idem, 'Die Geschichte der drei Prinzen. Weitere neue manichäisch-türkische Fragmente aus Turfan', *ZDMG* 139, 1989, pp. 328-45.

(24) P. Zieme *apud* Geng Shimin, Klimkeit, and Laut, *ZDMG* 139, 1989, p. 329, n. 7 によれば，ベルリンにある高昌出土文書の中にも，同じ文書からの断片があるという.

(25) Cf. Chao Huashan et al., *Sites divers de la région de Koutcha. Épigraphie koutchéenne*, (Mission Paul Pelliot. Documents conservés au Musée Guimet et à la Bibliothèque Nationale. Documents archéologiques), Paris, 1987, pls. XC-XCI, XCIV. これらの落書きの読みについては吉田豊，「ソグド語雑録（III）」，『内陸アジア言語の研究』V, 1989, p. 93, n. 10 参照.

車工作点の買買提・木沙氏に見てもらったが，どの地点で撮影されたかわからないとのことであった．帰国後，この写真と，黄文弼の調査報告[26]及び最近の『中国石窟・キジル石窟3』（東京，平凡社，1985, pp. 305-46）の解説を読み比べてみるうち，問題の写真は現在の編号の第220窟で撮影されたものらしいことがわかった．第220窟は後山北区と呼ばれる最も離れた所にある窟で，破損がひどく，地元の人も良く知らなかったのかもしれない．いずれにしても，事前の準備不足でこのような不手際が起ったのであり，将来の為の反省材料としたい．[27]

この種の仏教巡礼者による落書きのうち漢字によるものは，中国人の研究者によってかなり記録されている．しかし漢語以外のものについては不十分で，イスラム化以前の中央アジアの文献言語を研究する学徒の，今後の重要な課題である．

2. 1　クムトラ石窟窟群区

クムトラ石窟群の中では北に位置する窟群区の，若干の石窟に入ってみた．クムトラ石窟の個々の窟については，『中国石窟・クムトラ石窟』（東京，平凡社，1985, pp. 295-318）の解説が非常に便利で，筆者もその解説に従って，題記を確認するという方法で調査した．ただし上述したように，中国人による報告では，漢語以外の文字資料は言及されないものが多い．筆者が入った窟では，第70窟の左右の壁に多くのウィグル語の落書きがあった．草書体で書かれており，モンゴル期のものかと思われた．右壁の私の目の高さ程の所には，2行の短いパスパ文字の落書きも認められた．[28]

1982年に新たに発掘された窟のうち，題記を多く残す第79窟にも入ってみた．この窟に関しては，梁志祥・丁明夷の詳しい報告が『文物』1985年第5期 pp.

---

(26)　黄文弼，『塔里木盆地考古記』，北京，科学出版社，1958, pp. 35-38, 103, pls. 96-97.

(27)　幸い，梅村坦氏が1987年にキジルの石窟中の落書きを調査されていた．ただ残念なことに，彼が撮影した現在の第220窟の写真中には，問題のソグド語の落書きは写っていなかった．

(28)　語の初めの3・4文字程が見えるのみである．ただし壁全体が，後に窟内で焚かれた焚き火の煤でおおわれているため，この種の落書きの判読は著しく困難である．

1-6 に掲載されており，不鮮明ながら題記を含む壁画の写真も発表されている（『上掲書』，図版2-4）．題記には漢字のもの以外に，ウィグル語のものがある[29]が，後者については読みが公表されておらず，写真版も不鮮明で使用に堪えない．ウィグル文字は比較的古い時代に属する半楷書体で，初期のウィグル仏教とソグド語との関係に関心を持つ筆者には，それらの題記がどう読めるのかに興味があった．

梁・丁の報告によれば，第79窟には，前壁窟入口左側と方形の基壇正面の供養人図の2箇所に題記がある．このうち前者は，今回私が調査したときには，壁面の殆んどが剥落し，題記はすべて失なわれていた．ウルムチ博物館館長沙比提・阿合買提氏によれば，1987年に彼がそこを訪れたときには既になかったという．後者の方は今も残っており，上掲の『中国石窟・クムトラ石窟』中に図版183として，鮮明な写真が公表されている．この部分の題記について，気付いたことを述べておきたい．

左の端の僧侶の像の榜題は，梁・丁によれば，「頡里阿其其施城中/識知俱羅和上[30]」と読まれる．これにはウィグル語版はないが，「頡里」が il「国」を表わすことは，入口左側の榜題「新婦頡里/公主」のウィグル語版 il qunčui から明らかである．「阿其其施」では，2番目の「其」の部分は破損して確実な読みが得られない．「阿其□施」は「頡里」同様ウィグル語の音写に違いなく，後の「城中」から考えて，il as...š という名の都市が，西ウィグル国の中にあったのであろう[31]．

中央の童子の榜題は「童子捜阿/迦」である．その傍のウィグル語は kwncwy š'w'kと読めた．š'w'k は「捜阿迦」に対応するものに違いなく，kwncwy(或

(29) さらにブラーフミー文字の題記もある．

(30) この漢文の榜題2行は，左から右に読まれる．すなわち，ウィグル語の行の配列と同じである．

(31) 「其」が「斯」と読めれば，全体を「頡里阿(斯)[密]施」と読んで il asmīš の音写と考えられるかもしれない．因みに il という名の都市（すなわち il balīq）は，ウィグルの Maitrisimit の訳者 Prajñārakṣita の出身地として知られている，cf. J. Hamilton, *TP* 46, 1958, p. 443（森安孝夫氏の教示による）．il *asmīš とこの il balīq が同じ都市かどうかは筆者にはわからない．il asmīš については Sims-Williams and Hamilton *op. cit*, p. 59 も参照せよ．

いは kwncry）は「童子」に対応すると考えられるが，適切な形を見出し得ていない.[32]

2. 2 クムトラ石窟谷口区第7窟

窟群区の南にある谷口区の第7窟（すなわちGK第7窟）については，既に黄文弼及び閻文儒による報告がある．それらはさらに，梅村坦によって簡潔にまとめられているので便利である.[33] この窟は，長さ7.6m，幅2.1mで，洞の上半分及び奥壁は完全に破損していて，左右の側壁だけが残っている．ソグド語の落書きは，東壁（奥に向って左の壁）に3行にわたって朱書されている．その左隣には同様に朱書された3行の漢文の落書きがある．この外にこの窟の東壁には漢字の刻字がいくつかある.[34] さらには西壁に一行トカラ語の刻文がある．このトカラ語は G. Pinault によって解読されている.[35]

漢文の3行は，閻文儒に従えば，左から右に次のように読まれる：

1. 月二十四日畫□□寺
2. 大德法藏鄔郝…
3. 題記之耳甘一日畫金砂寺新□□了[36]

ソグド語は，その右に同じ行間隔で書かれており，閻文儒は，これをウィグル語と誤解しているが.[37] 両者を同じ時に書かれたものと考えたのは正当であろう．この推測はソグド語のテキストからも支持される．残念ながら，漢文もソ

(32) F. W. K. Müller, 'Zwei Pfahlinschriften aus den Turfanfunden', *APAW*, 1915, p. 10, 1. 12 の，Müller が Kuinui と転写する王女の名は，同じ語ではないかと思う．

(33) 黄文弼，『上掲書』，pp. 16-17；閻文儒，「新疆天山以南的石窟」，『文物』，1962年第7－8期；閻文儒，「亀茲境内漢人開鑿漢僧住持最多的一処石窟――庫木土拉――考察西北石窟散記之二」，『現代佛学』，1962年4期（どちらも，新疆社会科学院考古研究所編，『新疆考古三十年』，烏魯木斉，1983, pp. 562-82, 582-87 に再録．引用は後者から）；梅村坦，「大谷探検隊将来ウィグル銘文木片」，『内陸アジア・西アジアの社会と文化』，東京，1983, pp. 133-59.

(34) 黄文弼，『上掲書』及び閻文儒，「上掲論文」に録文がある．

(35) Chao Huashan et al., *op. cit.*, pp. 179-80, pl. XCII. Pelliot はこの窟をクムトラの Grotte Y と呼んでいる．

(36) 閻文儒，「上掲論文」，p. 585. ただし各行の上部は破損しているので，その上にどれ程文字があったかは不明である．

(37) 上掲『中国石窟・クムトラ石窟』，p. 297 も同様に，回鶻文字であるとする．

グド文も文字全体がかすれて見えにくい上に，現代の落書きがその上に書かれており判読は非常にむずかしい．筆者は次のように読んだ[38]：

1. [ ](.... sr)δ wxš(m)[y] (m)'xw ctβ'(r w)[ys]t sγt(')$_{?}$ 'z(w$_{?}$....
.....)

2. [ ](.)k(t.....xs....)y x(y)pδ t(ytsy)$_{????}$ np'ysy ''γtymn pr(...)

3. [ ](.....)'r (p)ty'mty prnxwnty wβ't

訳

「[...] の年6月24日，私 [... と ...] の弟子（である我々が）書き奉った．[...] により，[...] が成就し幸いありますように」

訳注

1.-1 (.... sr)δ. srδ「年」の前には十二支の名が期待される．かすかに見える残画には k とも読める部分があり，もしそうだとすると kyrm-「蛇」，mkr-「猿」，'kwt-「犬」，k's「豚」のいずれかであろう．

1.-2 wxš(m)[y]「六番目の」．この形は在証されている，cf. W. Sundermann, *Ein manichäisch-soghdisches Parabelbuch*, BTT XV, Berlin, 1985, p. 54.

1.-3 sγt(')「～日」．ソグド語で月の何日を表わすには，light stemの女性名詞 sγt- の単数位格形（～sγty'），或いは前置詞 pr と単数対格形の組み合わせ（pr～sγt'）を用いる．これらには各々変則的な形があり，前者には sγty，後者には前置詞 pr を用いず sγt' だけのものがある[39]．ここでは後者の形が用いられている．

「6月24日」は，漢文の「月二十四日」と一致する．これは偶然とは考えられず，この窟に来た僧侶の一行が，同じ時に記したものであろう．

---

(38) 解読には，筆者の現地でのメモ及び写真以外に，梅村坦氏が1987年に行った調査ノート及び写真を利用した．貴重な資料を利用させて下さった氏に感謝する．
テキスト中の［角括弧］は，文字が完全に失なわれている部分，（丸括弧）は文字が部分的に残っている部分，（...）は残画から知られる文字の数を示す．残画からの文字の読みが特に不確定な場合には，クエスチョンマーク（？）を付した．

(39) Cf. Sims-Williams, *The Christian Sogdian manuscript C2*, Berliner Turfantexte XII, Berlin, 1985, pp. 149, 150 及び Sims-Williams and Hamilton, *op. cit.*, p. 34.

1.-4 'ẓ(w...)「私…」. この後には人名が期待されるが，文字全体がかすれていて読めない.

2.-1 [ ](.)k(t...). 前の行からのつながりでは，人名が期待される．筆者は tathāgata- を前分とする人名の一部で[40]，-kt- は -gata- に対応するものと考えるが確証はない.

2.-2 t(ytsy)「弟子」. 読みは非常に不確実である．漢語の弟子に由来する tytsy はウィグル語文献に頻出するが，ソグド語には在証されていない．この読みが正しければ最初の例となる.

2.-3 np'ysy ''γtymn. np'ysy は動詞 np'ys/np'xšt-「書く」の現在語幹に語尾 -y が付いた形．これは不定詞[41]或いは未来受動分詞[42]の語尾と考えられる．ここでは後者の解釈は成り立たず，前者の解釈に従って直訳すると「書くために（我々は）来た」となる．これは落書きとしては少し奇妙なので[43]，ウィグル語の謙譲表現 -u/ü tägin-「～し奉る」のカルクであると考えた．ウィグル語の動詞 tägin- は täg-「到着する」から派生された動詞で，その原義はソグド語の動詞 ''ys/''γt「来る」と近かったのではないだろうか．壁面の落書きで用いられたウィグル語の表現 bitiyü tägintim「私は書き奉った」の実例については，上記注11参照.

''γtymn. -y- は -'- とも読める．1人称複数過去形（preterite）の語尾には，-ym, -ym'n, -'ymn が知られている．-ymn（或いは -'mn）は -ym'n 或いは -'ymn の変異形であろう.

2.-4 pr(...)「～により」. 次の行の接続法の動詞 wβ't と結びつき，全体は「（～の御加護）により……なりますように」のような祈願文となるのだろ

(40) 例えばtō'ktswm（=Tathāgatasoma-）という名前がある，cf. 吉田豊，『内陸アジア言語の研究』V, 1989, p. 93, n.10.

(41) 所謂 -aka 不定詞，cf. Yoshida, 'On the Sogdian infinitives', *Journal of Asian and African studies* 18, 1979. pp. 185–88. 或いは現在語幹と同形の不定詞の斜格形か，cf. I. Gershevitch, *Grammar of Manichaean Sogdian*, Oxford, 1954, § 920.

(42) cf. Sims-Williams and Hamilton, *op. cit.*, p. 26.

(43) ただし，この種の落書きでは，「誰々がここに来た」という表現を通常含んでおり，この解釈も不可能ではない.

う．1行目と2行目，2行目と3行目の意味のつながりは比較的に明瞭なので，行の初めの破損部はそれ程大きくなかったと考えられる．

3.-1 (p)ty'mty. pty'm「完成させる」或いは pty'ms-「完成する」の過去分詞形．後の形容詞 prnxwnty「幸ある」と並列の関係にあるのだろう．

3.-2 prnxwnty wβ't「幸いあれ」．これはウィグル語の表現 qutluγ bolzun にぴったり対応し，それを下敷にした構文であると考えられる．[44] wβ't は動詞 β(w)-～wβ- 'be' の3人称単数接続法である．従来ソグド語の be 動詞が wβ- 形式をとるのはマニ教文献に限定されるとみなされていた．[45] しかし上で推定したように，この落書きはその隣りの漢文のものと同様に，この窟を訪れた仏教徒によるものと考えられる．従って wβ't は仏教文献に用いられていることになる．

マニ教以外の文献で見出される wβ- の例は，最近いくつか報告されている．筆者が把握しているのは次の4例である．[46]

(i) Pelliot sogdien 16（仏典，敦煌出土）

(ii) Pelliot sogdien 26（仏教文献，敦煌出土）

(iii) TIID 416 A, III/365（キリスト教徒の碑文，高昌出土）

(iv) Or 8212 (86)（キリスト教徒の手紙，敦煌出土）

現在まで知られている5つの例から，2つの異なる結論を引き出すことができる．一つは，wβ- は何もマニ教文献に限定されるものではなく，今までその例が知られていなかったのは，偶然に過ぎないとするものである．

もう一方は，これらの5例がすべてウィグル人と深い関わりがあることに注目するものである．(i)の仏典の最後の行は奥書きで，本文と同じ筆跡で書かれたウィグル語である．[47] ソグド語でもウィグル語でも書くことができた人間は，

(44) qutluγ bolzun については，A. Bombaci, 'Qutluγ bolzun! A contribution to the history of the concept of 'fortune' among the Turks', (Part one), *UAJb* 36, 1965, pp. 284-91; idem, 'Qutluγ bolzun', (Part two), *UAJb* 38, 1966, pp. 13-43参照.

(45) Cf. Gershevitch, *op. cit.*, §794.

(46) Sims-Williams and Hamilton, *op. cit.*, pp. 38, 58 参照．彼らによれば，未発表のキリスト教文献にもwb-の形式は在証されるという．

(47) Sims-Williams and Hamilton, *op. cit.*, p. 40 参照.

歴史的背景を考慮するなら，ウィグル人の中に入り込んだソグド人か，ソグド語を能くするウィグル人かのどちらかであろう[48]．本文と奥書きの言語の違いは，ソグド語の方を正式な文語として用いることを示し，ウィグル語を母国語とする人間によるものである可能性が高い。

(ii)の文献を書いた xwtwz(qotuz) の息子の twγryl (toγrïl) は明かにトルコ人である．(iii)の碑文の2行目には，ソグド文字で書かれたトルコ語の人名が現われるし，(iv)の手紙の受け取り人は yl p'rs xwtlwγ 'lp trx'n (il bars qutluγ alp tarxan) というトルコ語の名前を持っている．第7窟のソグド語には，トルコ語の表現を下敷にしたカルクが見られた．この種のトルコ語化されたソグド語表現は，(ii), (iii), (iv) の文献にも見出される．実際，上掲の Sims-Williams と Hamilton の共著は，トルコ語の語句や，トルコ語のカルクを多く含む敦煌出土のソグド語文書の集成で，これらは9世紀の終わりから11世紀にかけてのものであろうとする[49]．

ウィグル人と関わりの深い文献に，マニ教ソグド語の特徴が見られることから，誰もが763年にウィグルの可汗がマニ教を導入した事実を思い浮かべるに違いない．また最近森安は，一度マニ教徒になったウィグル人が，後に仏教化したので，初期のウィグル仏典に見られるソグド語の借用語は，仏教ソグド語ではなく，マニ教ソグド語から導入されたものだとする説を発表している[50]．この歴史的事実と森安説を参考にすれば，マニ教文献に特殊な語形が，ウィグル人によるものと考えられるマニ教以外のソグド語資料に現われる事実は，次のようにして説明されるであろう．

ウィグル人は始め，ソグド人マニ教徒の布教によってマニ教に改宗した．そ

---

(48) 完全にウィグル人の中に同化してしまったソグド人というものを想定すれば，両者の違いは本質的なものではなくなる．

(49) Sims-Williams and Hamilton, *op. cit.*, p. 10 参照．トゥルファンやカラシャール出土の文献にも同種の資料はある．例えば上述のベゼクリク出土の 80TB60：01～03 のマニ教徒の手紙がそうである．また黄文弼，『新疆考古發掘報告』，北京，文物出版社，1983，図版27-2の木簡もその例である．因に一方の木簡の裏面のkwlwkはウィグル語の kölük「運搬用の家畜」であろう．今後もこの種の文献が新に発見される可能性は高い．

(50) 森安孝夫，「上掲論文」，pp. 15-18 参照．

の際（マニ教）ソグド語を習得し，それを文章語として用いた．彼らが後に他の宗教に改宗したときも，しばらくの間は（マニ教）ソグド語を文章語として使い続けた[51]．この仮説が正しいとすれば，ソグド語仏典の中には，ソグド人が書いたものと，ウィグル人がマニ教的なソグド語で書いたものがあることになる．上記の Polliot sogdien 16 及び 26 は，後者の例とみなされるだろう[52]．

筆者は，マニ教以外の文献に現われる wβ- の活用形の説明としては，2番目の解釈をとるが，これはあくまでも作業仮説であり，今後の研究で検証されなければならない．

3. ウルムチ

3. 1 照蘇県の石人

今回の訪中の最大の目的は，伊犂地区昭蘇県の仲馬場(現地名 Mongolküre)にある石人に刻された，ソグド語の碑文を調査することであった．文化庁との事前の接渉の段階で，昭蘇県は未開放地区であり，直接現地に行くことはできない旨知らされていた．そこで，博物館の研究員である伊斯拉菲尓・玉素甫氏

---

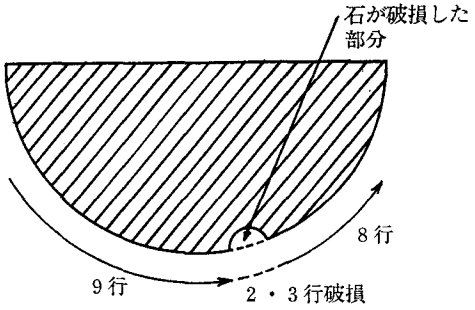
(51) 一方で，専らマニ教徒であった時代から，既に彼らはソグド文字を使ってウィグル語も表記していた．従って初期には，ウィグル人はソグド語とウィグル語（ソグド文字表記及びトルコ・ルーン文字表記）を併用していたと考えられる．後に，ソグド語及びルーン文字表記のウィグル語は廃用されることになった．

(52) 後者の仏典は前者に比べて少ないが，今後研究が進めば，もう少し増えるかもしれない．例えば，D. Utz が校訂したソグド語の『涅般経』の断片には cx[ ]pt と読める箇所がある，cf. D. Utz, *An unpublished Sogdian version of the Mahāyāna Mahāparinirvāṇasūtra in the German Turfan collection*, Unpublished Ph. D. thesis, Harvard University, Cambridge, Mass., 1976, p. 17, Mainz 185b(1). Sims-Williams はこの箇所をcx(š)["]pt と補っている，cf. Sims-Williams, *BSOAS* 42, 1979, p. 135. cxš'pt「戒律」(<Skt. śikṣāpada-) は，マニ教パルティア語経由で導入された語で，専らマニ教ソグ語で用いられる．この仏典を除けば，cxš'pt という形式は仏教ソグド語では用いられず，代わりに直接サンスクリットから借用された škš'pt を用いる，cf. 森安，「上掲論文」，p. 11. Sims-Williams の復元が正しいとすれば，ソグド語仏典中にマニ教ソグド語の要素が現われた例となり，ウィグル人による仏典ではないかと疑われる．数多いソグド語仏典の中でも，「菩薩」を表わす形式が pwδysβt であるのはこの文献だけであり，しかもこの形式がウィグルの古形（cf. 吉田豊，「ソグド語雑録（II)」，『オリエント』31, 1988, p. 175, n. 30）と一致することも偶然ではないだろう．さらに，この写本では，語末の -x と -γ の区別が失なわれる傾向を示し，比較的に晩い時代の写本と考えられている，cf. Sims-Williams, *apud* W. Sundermann, *Mitteliranische manichäische Texte Kirchengeschichtlicher Inhalts*, Berliner Turfantexte XI, Berlin, 1981, p. 194.

が撮影した写真によって，ウルムチの博物館で研究することになった．

問題の石人は[53]，上掲『新疆出土文物』によれば，高さ 191cm，『新疆古代民族文物』（北京，文物出版社，1985，図版説明，p. 15）によれば 230cm である．筆者が伊斯拉菲尔氏に確めたところによれば，191cm が正しい[54]．像は，右手でカップを，左手で剣の束を持つ髭面の突厥人男性を象ったもので，背面には7本筋の長い髪がみえる．R. Ic はこの像の前面の腰から下と，額及び右腕に刻文があるとするが[55]，伊斯拉菲尔氏によれば，額及び右腕に文字の跡はないという．腰から下の碑文は縦書きされており，ほぼ下の模式的に示された断面図のような位置に彫られているらしい：

背　面



前　面

破損部も含めると，全体は20行程の碑文であったことになる．

筆者がウルムチの博物館で見ることができた写真は，とても小さい上に質の

(53) 新疆にある石人全般と，ここで扱う昭蘇県の石人及びそれについての研究史については，L. Clark, 'Two stone sculptures of the "Old Turkic" type from Sinkiang', *UAJb* 50, 1978, pp. 42-48 が非常に便利である．Clark は，『新疆出土文物』，北京，文物出版社，1975, pl. 132 により，この石人の下半身に彫られた碑文がソグド語であることを正しく理解し，重要な資料であることを強調している．

(54) 230cm とするのは，『文物参考資料』1953年第12期の報告に拠っているのであろう．或いは，地上部が 191cm，地中部も含めた高さが 230cm なのかもしれない．

(55) R. Ic, 'O Kamennyx izvajanijax v Sin'czjane', *Sovetskaja etnografija*, 1958, No. 2, pp. 100-03 参照．ただし筆者は Ic の論文は未見で，Clark の「上掲論文」の引用に従っている．

良くないもので，文字の判読は非常に困難であった．破損部以降については，光線の具合で，殆んど読めず，かろうじて文字が確認できるところが何箇所かあるという程度で，句・文のレベルの解読は不可能であった．破損部以前の部分は少しましで，いくらかの語を読みとることができた．しかしこの部分でも，地面に近い部分は，雑草の影になってみえない箇所がある．何より残念なのは，地中にどれ程の文字がかくれているか，今の状態では全くわからないことである．

このような事情から，破損部以降については碑文の読みを提示できない．破損部以前でも，筆者が利用した写真では，第1，8，9行は判読不可能であり，残りの部分についても，極めて暫定的な読みであることは言うまでもない．また，一部の語句が読めるだけで，連続した翻訳はできないので，テキスト中に各々の語の意味を添えておいた．(56)

1. ////////////////////////////////////[
2. ctβ'r kyr'n γrβ.//////////////////[
   四 方向 多くの
3. γry' ..... h ..t rty 20+1 srδ.[
   山で? ? そして 21 年
4. δ'r rty 6 m'x 'myδ.. pr .... [
   保持した そして 6(カ)月 (?) ～によって
5. s'r p'w'.... t rty 20+6 srδ pšys'r (57) [
   ～へ (?) そして 26 年 後に
6. mwx'n x'γ'n npyšn βγy '.... /////[
   木杆 可汗 孫 神(なる)
7. nrxšnwγt š'δ sy..//////////////[
   (?) ??? シャッド(?) ?
8. m/////////////////////////////////[
9. ////////////////////////////////////[

破損部以後では，3行目に βγy「神（なる）」，m'tyh「母」，6行目に BRY「息子」，7行目に kyr'n「方向」と読める語がある．

---

(56) テキスト中の ////// の部分は，石は破損していないが，写真の上から個々の文字が確認できない部分，…は，個々の文字は確認できるが，確実な読みが得られない部分，[ ]は地中にかくれた部分を示す．文字の下の？は，読みに問題が残ることを示している．

(57) この語は，1988年に博物館を訪問した折，阿不都克由木・翟加氏所有の写真から読んだものである．今回は克由木氏が不在で，この写真を見ることができなかったのは残念である．

碑文の内容は明らかではないが，6行目の mwx'n x'γ'n「木杆可汗」の読みは確実で，この名前から碑文が彫られたおよその年代がわかる．木杆可汗は突厥第一可汗国の第二代の可汗で，553-572年の間位にあった．つまりこの碑文は彼以後，六世紀の後半に彫られたものと推定される．この推定はまた，古風な字体からも支持される．すなわち，判読可能な部分でみる限り，x(ϰ) と γ(ϰ) の形が異っている．x と γ の字形は，x が語末で長い尻尾を持つことを除けば，[58] 8世紀以後の文書だけでなく，トゥルファンのアスターナ出土の延寿16年（639）年の紀年を持つ文書でも既に失なわれている．[59] さらに，本碑文と同時代に彫られたブグト碑文でも，その区別は失なわれているとされている．[60] 外には，s(ϛ)も古風な字形である．また m(ϱ)は，普通の形(ϱ)からは少しく逸脱した形である．

全体の内容は明らかではないが，年数や月数が何度か現われることから判断して，可汗の偉業を記録したものではないかと思われる．従って，昭蘇の石人の碑文は，同時代のブグト碑文とともに，突厥史を研究する上での第一級の史料である．筆者が，殆んど未解読の段階で，このような報告を行う理由は，この資料の存在をできるだけ早く内陸アジア史の研究者に知らせ，一日も早く本石人の本格的研究が開始されることを期待するからである．［後記参照］

3. 2 センギム出土の Maitrisimit

ウルムチの博物館には，新疆で発見された種々の文物の実物や模造品が展示されている．それらの中には，既に研究が発表されているもの以外に，未発表の資料も含まれている．例えば，現在展示されている大型の poṭhi に書かれたウィグル仏典の断片2葉は，後者の例である．

---

(58) 昭蘇の石人でも，4行目の m'x の -x は ϰ のように長い尻尾を持っている．

(59) 吉田・森安・新疆ウィグル自治区博物館，「上掲論文」，p. 33 参照．

(60) ブクト碑文については，S. G. Kljaštornyj and V. A. Livšic, 'The Sogdian inscription of Bugut revised', *AOH* 26, 1972, pp. 69-102 参照．彼らのテキストの中では区別されていないが，写真版で見る限り x(ϰ) と γ(ϰ) はわずかに区別されているように見える．

館長の沙比提氏によれば，トゥルファンの東の勝金口（センギム）で，1960年に彼自身が発掘したもので，展示されているもの以外に，同じ文書に属する断片が数多く出土したという．筆者はは石人の写真を研究する合い間に，展示されて見える方の片面だけではあるが，これらの2葉のテキストを翻字してきた．日本に帰ってから調べてみると，これが初期のウィグル仏典 Maitrisimit の断片であることが判明した.[61] 2断片が Maitrisimit に属することは，Maitri「弥勒仏」の父 prxm'yw (Brahmāyu-) と母 prxm'β'ty (Brahmāvatī-) がどちらにも現われることから容易に推定できる．

このうちの一方の断片には，Maitrisimit のハミ本の第11章に対応箇所がある.[62] この断片のテキストを，より保存の良いハミ本を参考にして校訂すると次のようになる：[63]

1. [.. pw s'β'γ] 'yšyδyp 'wyk(y)[ryp s'βynyp]
2. [prxm'yw] (p)r'mn 'yky 'yl[ykyn 'wyrw]
3. [kwytwrwp ']ync' typ tyywr.. ''nc['m']
4. [m'nky] ''nc'm' 'δkw ''syγ twsw ''n(c)['']
5. m' 'δkw ẍwt ẍyβ kym m'nynk
6. ''βymt' p'rxymt' pwrx'n^{a} kwyn
7. tnkry twγ'r 'rmyš.... 'nt'
8. 'wtrw prxm'yw prwkyδ^{b} s'kyz twym'n
9. twyrt mynk pr'mnl'r pyrl'

---

(61) ウィグルの Maitrisimit については，Geng Shimin and H -J. Klimkeit, *Das Zusammentreffen mit Maitreya. Die ersten fünf Kapitel der Hami-Version*, Wiesbaden, 1988, pp. 1–9 の解説が最近のものとして便利である．

(62) ハミ本の第11章は既に発表されている，cf. Geng Shimin, Klimkeit, and Laut, '≪Das Erschein des Bodhisattva≫. Das 11. Kapitel der Hami-Handschrift der *Maitrisimit*', *AoF* 15, 1988, pp. 315–366.

(63) 縦書きの poṭhi であるとすると，2葉とも左右の再端を欠き，17行が現存する．中央部で5・6行，上下の両端を残している．1987年にこの文書を調査された森安孝夫氏によれば，大きさはどちらも縦 20cm，横 25cm である（ただし数値はおよそのもの）．糸を通す穴は見られないので，残存部は，穴の左側の部分であったのだろう．因みに，Hami 本の対応箇所は，3b4–20である．

10. pwrx'n ẍ' 'mr'nm'ẍyn[c] prxm'β(')[ty]

11. x'twnwγ ''y'ywr ''γyrl'ywrl'r[d]

12. t'ẍy ym' 'wγwl 'wγrynt' 'wl(w)[γ]

13. y'γyš s'cyγ y'γ'p[e] pr'mn(l')[r x']

14. 'wykδyr ''ncw pyrwr.. ''nt'['wtrw]

15. [tnk](r)yl'r 'ylky[f] xwrmwz-t'[tnkry]

16. [twyr](t) mx'r'c tnkry [l'r k']

17. ['ync' typ yrl](ẍ')ywr [ ]

[a] H[ami 本] pwrx'nlyγ; [b] H. pwrwkyt; [c] H. 'ym'nm'ẍyn (ただしこれは Gen Shimin et al. の誤読かもしれない); [d] H. ''γ'rl'ywr; [e] H. y'γyp; [f] H. 'ylyky

「この言葉を聞いて，婆羅門の Brahmāyu は喜び，両手をあげて，次のように言った.『何という喜び，何と良い利益，何と良い幸運であろう，私の家から太陽神なる仏陀が生まれるとは』. それから輔師の Brahmāyu は4万4千人の婆羅門とともに仏陀に対する愛から，夫人の Brahmāvatī を敬った. さらにまたその息子の為に，大きな捧げ物を捧げて，婆羅門たちにほめ言葉を与えた. それから神々の王である帝釈天は，四天王に次のように申された」

もう一方の断片は，ハミ本に対応する部分がない. しかし次の引用から明らかな通り，Brahmāvatī の（おそらくは Maitri を懐妊する）夢がテーマになっている：

...xwncwyy prxm'βty x'twn ẍ' 'ync' typ tyywr.. mwnk'δyncyγ ''δyncyγ twyll'r kwyrmyš syz ẍ'twnwm ['w](l)wγ 'wykrwnc[l]wk s'βynclyk pwl[γ]wm 'wycwn... (11. 5-10)

「...王妃の Brahmāvatī 夫人に次のように言った，『驚くべき，すばらしい夢をあなたは見た，我が妻よ. 私はとても嬉いので…』」

ハミ本の第3葉のa面は Brahmāvatī の夢の夢占いが問題になっており，こ

の断片は，今は失なわれた第2葉に対応する箇所があったのであろう．

ウィグル語の Maitrisimit には従来3種の写本が知られている．それらは発見地に因んで，センギム本，ムルトゥク本，ハミ本と呼ばれている[64]．今回筆者が扱った写本は，出土地を同じくするセンギム本に対応する箇所がない．しかも写本の外的な形式は完全に一致するので，センギム本と同じ写本の一部である可能性が高い．［後記参照］

3. 3 ソグドの分銅

今回ウルムチの博物館で，偶然ドウシャンベで出版された，タジキスタンの発掘品のカタログを見ることができた． *Drevnosti Tadžikistana. Katalog vystavki*, (Izdatel'stvo ≪Doniš≫, Dušanbe, 1985) がそのタイトルである．この本の217ページの図562には，ソグディアナ出土の石の分銅が説明付きで掲載されている．この分銅にはソグド語の銘文が書かれており，それを解読したところ，筆者が従来説明できずにいたことが明らかになった．それをこの機会に発表しておきたい．

現在までのところ，ソグディアナ出土の銘文付きの石の分銅を，筆者は4つ把握している[65]．それらは次の通りである．

(A) ペンジケントの城塞跡出土

出典：A. I. Iskakov, *Citadel' drevnego Pendžikenta*, Dušanbe, 1977, pp. 151–53（両面の写真も）

重量：200.081g

銘文：a面　20＋20＋4（＝44）

---

(64) センギム本，ムルトゥク本については，S. Tekin, *Maitrisimit nom bitig. Die uigurische Übersetzung eines Werkes der buddhistisehen Vaibhāṣika-Schule*, BTT IX, Berlin, 1980 参照．

(65) ソ連の共和国で発表されているこの種の出版物は，入手が極めて困難で，ここに引用した4つ以外にも，いくつか発見され発表されていると思われる．例えば，A. I. Iskakov, *Citadel' drevnego Pendžikenta*, Dušanbe, 1977, p. 153 によれば，昔のサマルカンドの遺跡（現在アフラシャブと呼ばれる）からも，石の分銅は発掘されたという．

b面　δrxmy[66]

(B)　出土地：同上

出典：同上，p. 153（分銅の模写も）

重量：1,530g

銘文：'δry 100+20+20（=340）[67]

(C)　ペンジケント出土

出典：A. I. Iskakov, *Drevnij Pendžikent*, Dušanbe, 1982, 図20

研究：V. A. Livšic and V. G. Lukonin, 'Srednepersidskie i sogdijskie nadpisi na serebrjanyx sosudax', *VDI* 1964, p. 175, n. 136.

重量：4,255g

銘文：a面　nw 100+20+20+10（=950）

b面　6 p't/10+7 rty knpy[68]

(D)　ペンジケント出土[69]

出典：上記参照

重量：記載なし

銘文：a面　462

b面　'δry p'tmnk/ctβ'r mynt/knp[70]

(A)～(C)では実際の重量が知られている．これらは発掘品であるうえに，すべてが石製なので，削り取りなどは考えられず，製作された頃（7－8世紀）の重量のままであるに違いない．(A)については重量の単位 δrxmy が分銅それ自体に書かれている．δrxmy の語尾 -y は numerative 形であろう[71]．この分銅で

(66)　筆者の読み．報告書は読みを掲げない．数字であると考えたようである．
(67)　筆者の読み．報告書は読みを掲げない．
(68)　Livšic の読み．正しい読みについては下記参照．
(69)　筆者が写してきた，写真のキャプションには出土地は記載されていないが，同じ箇所に掲載された他の出土品は，ペンジケント出土のものなので，このように推定した．
(70)　この読みは Livšic に問い合わせたものという．Livšic の読みは引用された彼のロシア語訳から容易に推測できる：
≪462 (draxmy)≫ (a面)
≪tri raza(?) po četyre ostaetsja nemnogo≫ ili ≪tri batmanak (mera vesa) po četyre ostaetsja nemnogo≫ (b面)
(71)　ソグド語の numerative については，Sims-Williams, 'On the plural and dual in Sogdian', *BSOAS* 42, 1979, pp. 337-46 参照．

計算すれば，1 δrxm は (200.081g÷44≒) 4.55g である．(B)では重量の単位は記載されていないが， δrxm であることは明らかで， ここでは 1 δrxm は (1,530g÷430≒) 4.5g である．(C)ではa面とb面に数字が記入されている． a面の数字で計算すると (4,255g÷950≒) 4.48g が得られ，(A)，(B)の数値とほぼ同じであり，これが δrxm 数を記したものであることがわかる．b面の銘文は難解で，Livšic と Lukonin は ≪6 raz (po) 17 i (eščo) nemnogo「17が6回，(さらに) 少し」≫と訳出し，次のような説明を加えている．「rty knpy『そして少し』の結合は，この銘文で用いられた重量の単位で測った重さは，この単位の6の17倍と，この単位の重さの一部を加えたものに等しいことを示すに違いない．(b面の) 重量表記では， この石は， 各々が17単位重量を含む等しい重さの，はるかに軽い分銅によって測定されたものと想定しなければならない．」

筆者は，Livšic が rty「そして」と読んだ語は，文字の形からむしろstyと読まれるべきであるし，p't は「度，場合」を表わす語で， それを「回，倍」と訳することは無理だという印象を持っていたが，[72] 交替案を提出できずにいた．しかし(D)の分銅をみるに及んで，この疑問は解決された．(C)と(D)は外的な形だけでなく，銘文もよく似ている．どちらもほぼ球形に近い自然石を用い，その片面に単なる数字，もう一方の面にやや複雑な銘文を記入している．(C)の場合と同じように(D)のa面の数字は，石の δrxm による重量を示したものに違いない．分銅の重量は記載されていないが， 1 δrxm は 4.5g 程度とわかっているので，全体は約 (4.5×462＝) 2,079g であったことがわかる．

次にb面の銘文を(C)のそれと比較してみる．

(C) 6 p't / 10+7 sty (或いは rty) knpy

(D) $'\delta ry\ p'tmnk_{3}$ [73] / $ct\beta'r\ mynt_{4}$ / knp

(72) 因みに，「倍」を表わすソグド語は y'wr である．

(73) 筆者は写真から，p'tz-mnk と読んだ．t と m の間にzに似た文字が見えた．Livšic はこれを無視したものと思われる．

両者が並行することは明確で，mynt（動詞 myn「とどまる，存在する」の3人称単数現在形）に sty が対応する．従って sty は，be 動詞の3人称単数形と解釈すべきであることがわかる．[74] 全体の解釈は(C)については，「(全体の重量は) 6 p't (で) 17 (δrxm) 不足している」，(D)については，「(全体の重量は) 3 p'tmnk (で)，4 (δrxm) 不足した状態にある」となるであろう．この解釈に従って p't と p'tmnk の値を求めると，1 p't は，((4,255g+4.48g×17)÷6=) 721.86g, 1 p'tmnk は ((2,079g+4.5×4)÷3=) 699g である．この値はほぼ同じなので，両者を同じ重量を示す単位と解釈することは許されるであろう．誤差は少ないとは言えないが，この種の単位の絶対量が時代や場所によってかなり変動があることを考慮すれば，特に驚くにはあたらない．例えば，この分銅と同様7—8世紀頃のものと考えられる銀器の銘文から算出される 1 δrxm の重量は 4.7g で，[75] 上で得られた 4.5g とかなり違う．

p't と p'tmnk の違いは，前者が後者の略称であると説明できるだろう．ただしこれと，中央アジアで使用された batman の関係は筆者にはわからない．[76] knpy「より少ない，足りない」と knp では，前者が語源的に正しい形式であるが，knpy の -y を格語尾と解釈して逆形成された knp という形式も，同時に存在したのであろう［後記参照］．自然石を分銅として代用する場合，きちんとした重量のものは得難い．その石に何 δrxm かを加えて，全体で適切な重量の分銅としたのであろう．自然石の場合，何 δrxm かを増して都合の良い重さにすることの方が容易なので，この種の分銅では常に knp(y) が用いられる

(74) ソグド文字の資料では通常 'sty と綴られるが，sty の表記も稀に在証される，cf. Sims-Williams and Hamilton, *op. cit.*, p. 51, l. 8. M. Schwartz ('Sogdian fragment of the *Book of Psalms*', *AoF* 1, 1974, p. 257, n. 4) が，キリスト教ソグド語に固有の形式であるとするのは言い過ぎであろう．

(75) Livšic and Lukonin, *art. cit.*, p. 176 参照．

(76) 形式と重量の類似（因に，batman は斤に対応する）から考えて無関係とは考えられない．batman については，L. Ligeti, 'Un vocabulaire sino-ouigour des Ming', *AOH* 19, 1966, p. 146 参照．G. Clauson (*An etymological dictionary of pre-thirteenth century Turkish*, Oxford, 1972, pp. 305-06) や A. von Gabain (*Alttürkische Grammatik*, 3rd ed., Wiesbaden, 1974, p. 327) は，batman の語源を提案しているが，両者が一致していないことからも，その由来が十分明らかでないことが知られる．

ことになる.

4. おわりに

新疆ウィグル自治区には，まだ多くの未発見，未公開のソグド語の資料があるに違いない．今後も現地の研究者と共同で新しい資料の発見と研究に努力していきたい.[77]

後記

p. 78：校正の段階で，ウルムチの阿不都克由木氏より，碑文の白黒写真を送って頂いた．この写真は文字の解読には耐えないが，碑文の下端が見える点で重要である．それによれば，筆者のテキストの各行末の後には5～7字が欠けていることがわかる．因みに3行目の終わりはほぼ確実に 'xš'wnh「国，領土，支配権」と読め，3-4行は「そして21年間国を保持した，支配した」と訳せる．これは木杆可汗の支配年を示すものかもしれない．なお，筆者と克由木氏の間の連絡の労をとって下さった楠木賢道氏に感謝する.

p. 81：H. -J. Klimkeit 氏にこれらの2葉について知らせたところ，筆者の発見を確証するとともに，P. Laut 氏による第2葉の読解を教示下さった．ここで謝意を表わしたい.

p. 84：ムグ文書 Nov. 1, verso 42 に ('yw) knph 20「19」が在証される．ただし Bogoljubov と Smirnova は knph を krp' と読み物の名と考えたようである，cf. M. N. Bogoljubov and O. I. Smirnova, *Sogdijskie dokumenty s gory Mug* III, Moscow, 1963, pp. 37–41.

---

(77) 筆者が今回行ったような調査を希望する人は，あらかじめ新疆維吾尔自治区文化庁文物処（中国・新疆烏魯木斉市勝利路193号）の処長韓翔氏宛に，調査計画を知らせ，経費等について相談することが望ましい．文化庁との事前の合意がなければ，写真の撮影や未開放の文物の調査はできない.